

身近なものから  
イメージを広げる  
絵画制作

Hiroaki Kano

狩野 宏明

奈良教育大学 美術教育講座

# 身近なものからイメージを広げる絵画制作

奈良教育大学 美術教育講座 狩野 宏明

## 1. はじめに—絵画の主題について—

古来、人間は様々な主題の絵画を制作してきました。西洋においては、古代ギリシャ・ローマの神話や、キリスト教の教義など、人々が信仰していた宗教世界を主題とした「神話画」や「宗教画」が多く描かれました。また、国王や貴族の「肖像画」、経済力を持った市民たちが注文した「風景画」や「静物画」も主要な主題でした。さらに画家たちは、これらの宗教的な主題や既存のジャンルには収まらない表現を求め、文学や実際の戦争や事件などを主題として、人間の深い感情や精神世界を描くことを試みました。このような主題の探求は、絵画を単なる現実の再現や模倣に留めることなく、絵画独自の表現を迫及することを促し、抽象的な形態と色彩による作品や、現実とは異なる光景を描いた作品などが生み出されました。

現代においては、絵を描く際に何を主題とするか、つまり何を表すかについて、制作者は自由に考え決定することができます。これはとても幸福なことであると言えますが、同時に「いったい自分は何を描けばいいのか」という問題も生じます。自身の中にある漠然とした感情やイメージを、豊かに広げて絵を描くためにはどうすればよいのでしょうか。

## 2. 筆者作品紹介



筆者作品<sup>ししおど</sup>《鹿踊りの始まり》

油彩、綿布、パネル、145.0×182.0 cm、2014年

上の写真は、筆者が制作した油絵の画像です。タイトルは<sup>ししおど</sup>《鹿踊りの始まり》と言い、サイズは145.0×182.0 cmで2014年に制作しました。この絵は、具体的に目に見えるものを描いた、いわゆる具象絵画ですが、現実の世界とはどこか違った不思議な風景です。この作品は、どのような主題で描かれているのでしょうか。本書では、この作品を例に、どのように主題を決定し、作品を作り上げていくのかを考えます。

まず、本作には何が描かれているのかを記述してみましよう。画面中央に、金属でできた天体のような形をした球体があります。その中には、見慣れない植物が浮かんでいます。球体の下には、緑、青、赤に光るダンスホールのような舞台があり、左下と右下にはそれぞれ、「LOG IN」、「LOG OUT」と書かれた光

る文字が見えます。また、球体と舞台の上、そしてその周辺には、白黒で描かれた鹿たちが配置されています。背後に目を移すと、そこには信楽焼のたぬきや料理人のような女性の置物、大黒天の彫刻、廃材などが置かれ、廃れたお店が立ち並んでいます。そして空には、星々がまるで花火のように瞬いています。

このようにこの絵には、一見したところ脈絡のないものたちが一緒くたに描かれており、絵を見た人は、これがどのような世界で、何を表しているのか困惑してしまうかもしれません。しかし、そのような反応を呼び起こすことが、筆者にとって重要なねらいの一つなのです。鑑賞者が作品の前に立ち止まり、「おや？何か奇妙な風景だな」と感じることで、絵と対話してもらうための第一歩となります。

### 3. 作品構想① 身の回りのものや風景に注目する

このように筆者は、現実とは異なる不思議な風景を描いていますが、この絵に描かれたものや風景を全て自身の頭の中で想像して描いたかという、そうではありません。筆者は、作品を制作するための下準備として、まず自身の身の回りに存在する現実のものや風景を取材し、スケッチをしたり写真を撮ったりすることから始めます。《鹿踊りのはじまり》<sup>ししおど</sup>は、現在筆者が暮らしている奈良をはじめ、様々な場所で実際に目にしたものや風景を組み合わせで描いた作品です。

筆者は、身の回りに存在するものや風景に注目するという行為が、絵の主題を決定する上で、重要な役割を果たすと考えます。なぜなら、私たちを取り巻く環境にあふれる様々なものや風景にあらためて注目してみると、それらの中に、人が作り上げてきた制度や歴史、さらには物語や神話などにも結びつく世界の構造が内在していることに気付かされることがあり、それらが絵画の主題を見出すための鍵となると思われるからです。



奈良の鹿（筆者撮影）

例えば、筆者の作品《<sup>ししおど</sup>鹿踊りのはじまり》には、鹿が描かれています。奈良に暮らしている人々にとって、街中に鹿がいることはすでに見慣れた風景になっています。鹿たちも車に気を付けながら道路を渡り、観光客から鹿せんべいをもらいます。

しかし、外から来た人にとってこの光景は、とても奇妙で珍しいものと感じることでしょう。日本では古来、鹿は神聖な動物と見なされ、特に奈良の鹿は、奈良時代に鹿島から春日山に神様が鹿に乗って移ってまいられたという言い伝えから、神鹿として大切にされてきました。そして現在は、奈良公園や春日山原始林の生態系とともに愛護されています。このことから奈良の鹿は、古代の神話や、人間が暮らす都市環境と自然との関係性を内在する象徴的な存在であると言えます。そして、この鹿の存在を通して見出された神話や、都市と自然との関係は、絵を描く上での重要な主題の一つとなりえるのです。

奈良の鹿に限らず、私たちの身の回りには、このような象徴的な構造を有しているものが多く存在していると考えられます。それゆえ、あるものや風景を

見た際に、それに興味を持ったり、独特であると感じられることが重要です。では、身の回りのものや風景に内在する象徴的な構造は、どのようにして発見することができるのでしょうか。

#### 4. 作品構想② 隠れた魅力を発見する

筆者は、絵画制作の下準備のために、自身の身の回りに存在するものや風景を観察する際、以下のような基準で取材をします。

- I. その土地にはありふれているが、他の土地では見られない特有のもの。  
(奈良の鹿など)
- II. 人間が現代の都市環境の中で生活する際に、目にすることが困難なもの、あるいはそれを見るための特定の場所が設けられているもの。  
(手つかずの自然、動物園・植物園・博物館・美術館などに展示された動植物、標本、テクノロジー、芸術品など)
- III. 現実世界において物理的に隠されていて、見ることが稀であるもの。  
(工事現場であらわになる都市の地下構造、建築物の内部構造、人間や動物の体内、骨格など)
- IV. 日常にあふれているけれども、特に美的価値を持ったものとして注目されることが少ないもの、あるいは時代遅れであったり時代錯誤であるもの。  
(ゴミ捨て場、廃墟、一昔前のテクノロジーなど)

この世界には「もの」があふれていますが、美しいものとして見るべきものと、注視するに値しないもの、あるいは「このように見るべき」といった価値基準によって仕分けられていることがしばしばあります。身の回りのものや風景に興味を持ち、その独特の魅力を感じるためには、美しさに対する先入観を取り払い、一般的には美しいものと見なされないものにも注目してみることが、隠れた魅力を発見する糸口の一つとなると考えます。

例えば、筆者作品《<sup>ししおど</sup>鹿踊りのはじまり》の背景には、廃墟のような建築物が描かれていますが、その古びた質感は、そこに流れた時間や記憶が刻み込まれている物質であると捉えることで、古代の遺跡と同様に、悲哀を含んだ美しさを感じることができるのではないのでしょうか。



筆者作品《<sup>ししおど</sup>鹿踊りのはじまり》（部分）

### 5. 作品構想③ イメージの飛躍 —異なる文脈を結び付ける—

さてここまで、身の回りに存在するものや風景に興味を持ち、その独特さを感じることで、隠れた魅力を発見し、絵画の主題となりうる要素を見出す方法について述べてきました。では、これらの要素から、実際の絵画制作における主題をどのように決定することができるのでしょうか。

筆者が作品《<sup>ししおど</sup>鹿踊りのはじまり》を制作した際には、その主題を決定するために、イメージの飛躍というべき現象が働きました。本作のタイトル《<sup>ししおど</sup>鹿踊りのはじまり》は、詩人で童話作家の宮沢賢治の短編物語『<sup>ししおど</sup>鹿踊りのはじまり』から引用しています。この物語を読んだことによって、それまで様々な場所で取材したものの風景に隠された魅力が次々と結びつき、絵画の主題を決定

づけることとなりました。

宮沢賢治の『鹿踊りのはじまり』は、要約すると以下のような物語です。

一人の農民が温泉に出かけますが、山の中に手ぬぐいを置き忘れたことに気付き引き返します。すると、山の鹿たちが手ぬぐいを取り囲んでいるところに出会います。農民が陰から見ていると、鹿たちは今まで見たこともない手ぬぐいを廻って恐る恐る議論していますが、最後には自分たちに危害を加えるものではないことを認識し、歌を歌いながら踊りだします。農民はその様子に心を奪われ飛び出してしまい、鹿たちは驚き逃げてしまいます。農民は手ぬぐいを拾って再び山の中を歩いていきます。

このように、宮沢賢治の物語の中では、自然の中で暮らす鹿たちが、手ぬぐいという人工物を恐る恐る受け入れていく様子が描かれています。このような自然（鹿）と人工物（手ぬぐい）の関係に対して、奈良の鹿は、先述した通り、人や人工物や都市環境にすでに慣れており、もはやそれらにあからさまに驚くことはありません。鹿たちと共に暮らす奈良の地で、宮沢賢治の物語を読んだ経験から、鹿に象徴される自然と人工物の関係が、自身の絵画作品の重要な主題として浮かび上がってきました。

筆者作品《鹿踊りのはじまり》では、奈良をはじめ様々な場所で取材した人工物を組み合わせ、自然が全くない世界を描きました。それらの人工物は、廃墟や廃材、古びた置物や機械を選択することで、人間が作り上げてきた都市環境の長い歴史と記憶が感じられるように意図しています。そして画面中央には、この絵の中で唯一の植物が浮かんでいます。鹿たちはその奇妙な植物を取り囲んでぐるぐると廻っています。

つまり筆者の作品においては、宮沢賢治の物語に登場する自然と人工の関係が、全く逆転しているのです。宮沢賢治の作中で、山の鹿が手ぬぐいを恐る恐る取り囲んでいたのとは反対に、都市環境に慣れた奈良の鹿は、もしかしたら将来、自然の植物を発見して驚いてしまうかもしれないというイメージが、筆者の中に想像されました。おそらく画中に描かれた鹿は、植物を恐る恐る検証

したのち、自分たちに危害を加えるものではないと理解し、ダンスホールのような舞台の上で踊り出すと想像できます。

このような発想は、突飛で奇妙なもののように感じられますが、身近なものを観察し続け、偶然読んだ物語の作用によって、本来異なる文脈に属していたもの同士が結びつき、イメージの飛躍が訪れた結果、筆者が描くべきであると感じる主題とヴィジョンが生まれました。

## 6. おわりに―世界を観察する力―

冒頭に述べたように、絵を描く際に自由に主題を設定することができる現代においては、何を描けばいいのか分からないと途方に暮れてしまうことがしばしばあります。これは絵画作品を制作し発表する制作者に限らず、美術教育において想像力を駆使して描く様々な場面で起こりうることであり考えられます。

絵画が視覚芸術である限り、頭の中にある漠然としたイメージや表現したいヴィジョンを、形と色で画面に描き出すことが必要です。その際に、自身の目の前に広がる世界を観察する力は、頭の中のイメージを明確にし、自身が表現したい主題を見出すための手助けとなります。自然、人工を問わず、多様なものがあふれる世界の中に、自身の興味を引き、独特な魅力を持つものを日々発見し続けることで、絵画の主題の決定に結びつくイメージの飛躍が起こる可能性が広がると考えます。

### [ 参考文献 ]

谷川渥監修、小澤基弘、渡邊晃一編『絵画の教科書』日本文教出版、2001年

美術出版社編集部、藤原えりみ編集、増補新装『西洋美術史：カラー版』

美術出版社、2002年

奈良の鹿愛護会監修『奈良の鹿：「鹿の国」の初めての本』京阪奈情報教育出

版、2010年

宮沢賢治『鹿踊りのはじまり』（堀尾青史編集代表『日本児童文学大系 第18巻 宮沢賢治集』ほるぷ出版、1978年、pp. 59-67所収）

## 狩野 宏明 (Hiroaki Kano)

---

2010年 筑波大学大学院 人間総合科学研究科  
博士後期課程芸術専攻修了（芸術学博士）  
2010年～  
2012年 文化庁新進芸術家海外研修制度研修員  
としてフィレンツェ（イタリア）に滞在  
2012年 筑波大学 芸術専門学群 非常勤講師  
2013年 奈良教育大学 特任准教授  
2014年 同大学 准教授



### 【研究テーマ】

イタリアのルネサンス絵画を中心に、特に具象絵画における主題と空間表現について研究し、絵画を設置する展示空間との関わりも含めた総合的な空間演出への応用の可能性を考察しています。また、絵画の制作者としての方法論を、授業やワークショップ等に活用し、実技と実践を重視した美術教育を研究しています。

### 【著者の自己紹介】

—これから挑戦してみたいこと

ニューヨークで個展をすること。

—好きな小説

『火星年代記』レイ・ブラッドベリ      『一九八四年』ジョージ・オーウェル

---

## 身近なものからイメージを広げる絵画制作

---

著者 かの ひろあき  
狩野 宏明

2016年2月29日 第1版

奈良教育大学出版会

〒630-8528

奈良市高畑町

TEL: 0742 (27) 9135    FAX: 0742 (27) 9147

E-mail: [g-kenkyu@nara-edu.ac.jp](mailto:g-kenkyu@nara-edu.ac.jp)

URL: <http://www.nara-edu.ac.jp/PRESS/>